

自分らしさを生かし、学級や学校に参画しようとする子どもの育成

小 学 校 森田 宏美

研究協力者 尾川 満弘（愛媛大学）

1 主題設定の理由

子どもは学びの主役であり、有能な学び手である。子どもは、「やってみたい」「この課題を解決したい」「友達の意見を聞いてよかった」「もっとよい自分になりたい」と夢中になって話し合ったり、よりよい自分になろうとどうすればよいか考えたりする。このような子どもの理解を基盤として、前年度の研究では、くすのき学習【学級・学校】の授業を創るとき、私たちは、目の前の子どもの姿を見詰め、子どもの思いや願い、心の動きや高まりを丁寧に見取り、聞き取りながら、子どもの学びをどう指導し、評価するべきかを考え、実践してきた。子どもたちは、自分が実践したことで学級がよりよくなっていくのを実感することで、満足感を感じ、〈自己効力感〉が高まり、更に学級や学校に主体的に参画しようとする姿が見られた。

学習指導要領の改訂に伴い、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が進められている。くすのき学習【学級・学校】における「深い学び」を実現している子どもの姿とはどのようなものであるのか、子どもの主体性と教師の指導性がよりよく発揮される子どもの学びの過程をどう創るのかということ、を、「自分らしさ」を一つのキーワードとして、研究を進めていきたいと考えている。

学級や学校は、子どもたちにとって、未来の社会に向けての準備段階の場である。その準備の時期である学級や学校では、様々な変化に向き合い、積極的に友達と協働して課題を解決していくことが必要である。そのためにも「自主的・実践的に取り組む力」を身に付け、それらの力を発揮しながら課題を解決し、学級や学校に参画しようとする子どもを育成する必要があると考える。

本研究では、「自分らしさ」をキーワードに、「なす事によって学ぶ」を重視した教育活動を展開し、様々な課題に積極的に向き合い、友達と協働して課題を解決し、新たな課題に向け挑戦することのできる資質・能力を育成したいと考える。

自分がこれまで何気なく生活していたことにはこんな意味があったのだということに気付いたり、他者の意見を聞いて、新たな目標に気付いたりし、考えが変わる。今の自分自身や自分たちを見詰め、何が必要か考え、実践し、振り返る。このような過程を経て、「もっとよくなりたい」「自分たちならできる」という思いを持つことが、本研究が目指す、「自分らしさを生かす」姿であると考え。学びを積み重ねていくことで、これまで意識せず行動していたことが、少し立ち止まってどうすればいいか考え見直していきながら行動していく。子ども一人一人が自分がどのようなことをすることが学級や学校の成長につながるのかを考えることのできる子どもを育てたいと考え、本主題を設定した。

2 くすのき学習【学級・学校】における「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐくすのき学習【学級・学校】の授業づくり

ア くすのき学習【学級・学校】における「深い学び」とは

くすのき学習【学級・学校】における「深い学び」とは、次のような子どもの姿の中に見ることができると仮定する。

学びをつなぎながら身に付けた「自主的・実践的に取り組む力」を発揮して、自分らしさを生かし学級や学校に参画しようとする子ども

学びの出発は子どもたちの、「こんな自分になりたい」という気持ちでありたい。そして、その思いを達成し、それを生かすことが学級や学校をよりよくなることにつながるのだというこ

とを感じさせたい。そのためには、もの・こと、人とのかかわりが重要になる。それらのかかわりを通して、学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合ったり、役割を分担して協力して実践したりする。時には、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決や将来の生き方を描くために意思決定して実践したりもする。そのような活動を繰り返しながら身に付けた「自主的・実践的に取り組む力」を基に、子どもは、学級や学校での生活や人間関係をよりよく形成し、学級や学校での生活づくりに主体的にかかわり、自己を生かそうとする。このように、自分は学級文化や学校文化をつくる形成者であることを自覚し、自分の課題や自分の役割について真剣に考え、実践し、改善しながらよりよい学校や学級づくりに参画しようとする子どもの育成を目指す。

イ 子どもと共に学びをつなぐくすのき学習【学級・学校】

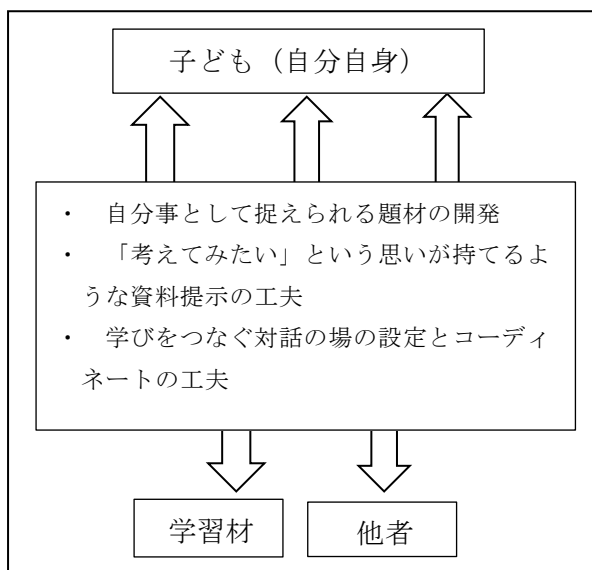


図1 子どもと共につなぐ学習

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て

ア 学習材とつなぐ手立て

- ・ 子どもの主体性や自治性・自発性を引き出す題材の開発・構想
- ・ 子どもの「解決したい」という気持ちを引き出す出合いの場の設定の工夫

くすのき学習【学級・学校】において、題材の持つ力は大きい。子どもが「自分事」として捉えた題材は、自然と学びをつなげ学習意欲を喚起し、持続させる。子どもが「自分事」として捉えられるように、題材にかかわる様々な資料やアンケート等を活用していきたい。その中で、学級や学校での生活上の課題を明らかにし、その解決に向けて話し合ったり、考えたりしながら意思決定していくことができるような題材の開発・構想を行う。

そして、子どもが主体的に学習材とのかかわりを深めることができるような出合いの場の設定を工夫する。学習材とかかわる中で、「もっとよくなりたい」「よくなるためにこういうこともできるようにがんばりたい」といった子どもの活動意欲を高められるようにしていく。また、学級での話し合いを通して、友達の意見を参考にすることにより、「もっとよい方法があるのではないか」「友達の考えを参考にしたいな」といった自分の考えを再検討し、更に学習材と深くかかわっていかうとする気持ちを持たせられるようにすることを大切にしたいと考える。

子どもは、題材について「自分事」として出会い、その解決に向けて主体的に話し合ったり、考えたりしながら各教科等で身に付けた力を総合的に働かせ、学級生活における自他のかかわりの中で、具体的な意思決定をしていく。自己中心的な「見方・考え方」や自分本位な意思決定ではなく、学級の成員であることを意識し、学級生活を通して自己指導能力を高めたり、自己実現を図ったりすることができるような工夫が必要である。そのために、教師は、よりよく生きようとする思いを持つことができるよう、子どもの思いや考えの流れを予想し、汲み取りながら子どもと学習材、他者、そして、子ども自身とをつないでいけるような手立てを講じていく。

イ 他者をつなぐ手立て

- ・ 自分の変容やメタ認知を促す機会の工夫
- ・ 現在や将来に希望や目標を持って生きる意欲や態度を形成させる設定の工夫
- ・ ファシリテーション・ツールの活用の工夫

「追究の場面」では、子どもが「見方・考え方」を働かせながら学習材とかかわり、自分自身と対話する「自己内対話」を繰り返しながらできるようにする。意思決定する際は、ファシリテーション・ツールなども活用して、子ども同士で考えを比べたり、それぞれなぜそう考えたのかを聞き合ったりして、自分の考えを深める。教師は問い返ししながら行為の背景にある思いについて聞き出すなど、対話をコーディネートすることを通して、興味・関心など多面的・多角的に自己理解を深めながら、自分自身のよさを実感し、学習材とのつながりを発展させていく。また、活動の様子を撮影した写真やチェックリストを活用し、実践したことを振り返ることで、自分の変容を感じることができるようになりたい。その際、自分への気付きや意思決定を促す適切な情報・資料を提供し、将来に希望を持って生きる意欲や態度の育ちにつながるように、活動意欲の持続を図りたい。

ウ 自分自身をつなぐ手立て

- ・ 学習材や自分自身との「自己内対話」を深めることのできる指導の工夫
- ・ 活動の達成状況を把握するチェックリスト等による振り返り
- ・ 互いのよさを認め合う他者評価
- ・ ファシリテーション・ツールの活用の工夫

「振り返り」の場面では、自己実現を感じさせたり、達成感を味わわせたりする場を設定し、自分の成長を自覚することができるようにする。そのために、ファシリテーション・ツール等を使い自己評価や他者評価を行う。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

ア 評価の視点

「深い学び」が実現できたとき、次のような子どもの姿が表れると考える。

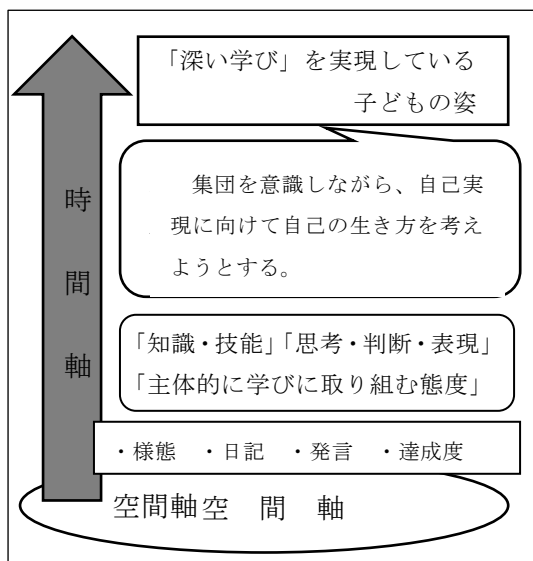
- 学級や学校での生活づくりに主体的にかかわり、自己を生かそうとするとともに、目標を持って、日常の生活をよりよくしようとする。
- 学級や学校の一員として、自分のよさを生かすためにすべきことを主体的に考え、活動している。
- 学級や学校の一員として、自分に合った目標を立て、友達と協働して目標の達成に向け主体的に行動しようとしている。

子どもが深い学びを実現する過程で、資質・能力がどのように発揮され、高められているかを見取っていく。くすのき学習【学級・学校】における「深い学び」を実現しようとしている子どもの姿を、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三つの視点で、次のように整理した。

学習過程	評価の視点	「学習材」「他者」「自分自身」とつながった姿
出 合 い	<ul style="list-style-type: none"> ○ これから学ぼうとする学習材について自分がすべきことを理解している。 【知・技】 ○ 自分の思いや考えを持ち、活動への見通しを持つことができている。 【思・判・表】【主】 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 興味を持って学習材とかかわり、「自分事」として考えている。(学)(自) ・ 自分の考えを持ち、見通しを持って活動に取り組もうとしている。(学)(自)

追 究	○ 自分に合った具体的な意思決定ができる。【知・技】【思・判・表】 ○ 自分に合った目標を立て、活動することができている。【主】	・ 学級の一員であることを意識した意思決定をしている。(自)(他) ・ 意思決定したことを友達と協力するなどして、主体的に活動している。(自)(他)
振 返 り	○ 「今の自分」に価値や意味を見だし、これからの行動の在り方を身に付けている。【知・理】 ○ 現在や将来にわたってよりよく生きるために主体的に行動しようとしている。【主】	・ 子ども自身が自己の成長や変容を把握し、今後の生活の改善に生かそうとしている。(自) ・ 自己のよさを生かし、友達と協働して目標の達成を目指しながら学級の成員として主体的に行動しようとしている。(自)(他)

イ 評価の具体的な手立て



(ア) 空間軸から見た手立て

授業や生活の中での子どもの様態観察と、チェックリストにおける内容や自己評価・他者評価の記述を手立てとし、子どもの理解を深め、指導の改善につなげる。

様態観察については、子どもが実践している中での表情や行動、日記や生活している中でのつぶやきから自分を見詰め、自己の生き方をよりよくしていこうとしているかを見取る。見取ったことを賞賛したり他の子どもに伝えたりしながら、「さらによりよくなりたい」「自分も頑張りたい」という気持ちにさせ、個から全体へ学びをつなげたり深めたりしていく。

(イ) 時間軸から見た手立て

定期的に、これまで書いてきたものを読み返したり、掲示してある学級でまとまった考えを見たりして、これまでの自分や他者の思いや考えを振り返る機会を設けていく。過去の自分を今の自分を比較し、自分に変容があったかやこれから集団のために何をしていくべきなのかを考えることを通して、集団の中での自分の役割を自覚し、集団に参画しようとする思いが持てるようにしていく。

(ウ) 子どもが自己評価する際の手立て

自己評価は子どもと自分自身をつなぐ効果的な手立ての一つである。活動の目当ての達成度を数値として評価することと、自由記述による活動の振り返りを合わせて行う。活動をしたことによる自分の成長や学級の成長をじっくり見詰め、よりよく生きるためにこれからの自分や自分たちに何が必要なのか考えていくことができるようにする。また、チェックシートやワークシートによって、現在や将来にわたって自分らしく生きるために、自分に合った目標を立てることができているか、自己のよさを生かそうとしているか他者と協働して目標の達成を目指しながら主体的に行動しようとしているかを確認できるようにし、子ども自身が自己の成長や変容を把握し、主体的な学びの実現や今後の生活の改善に生かしたりすることができるようにする。その変容によって学級がどのように変容したか、自分のしたことが学級や学校に必要であったか考えられるようにする。

(森田 宏美)

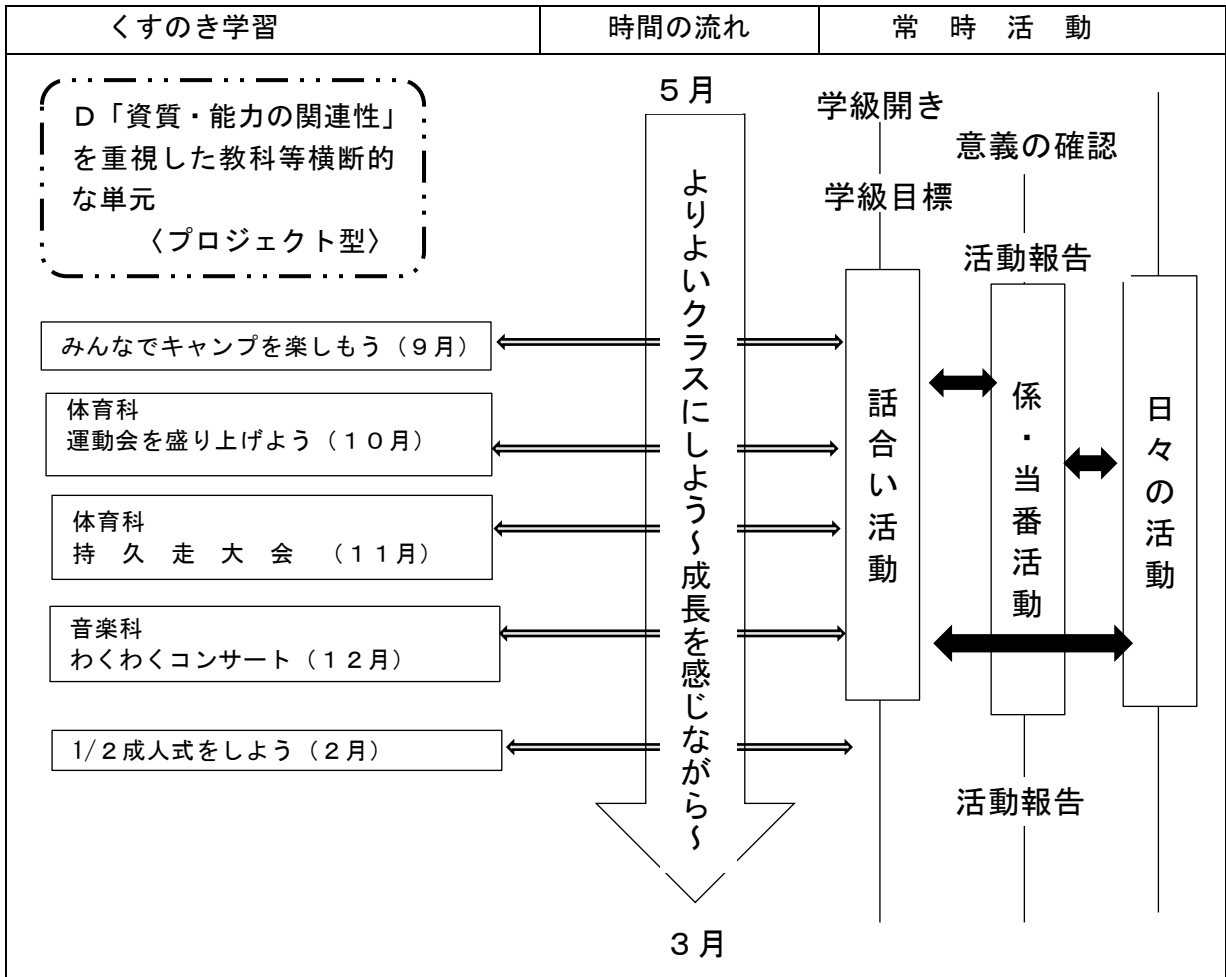
【実践事例】

第4学年

「よりよいクラスにしよう～成長を感じながら～」

くすのき学習【学級・学校】（+体育科・道徳科）

【単元全体構想図について】



本単元は1年間を通して子どもたちと共に学級を創り上げる単元である。いわゆる「学級づくり」そのものの単元である。学級づくりをプロジェクト型学習として、1年間の見通しを立てて行うことが、「学級に参画する」子どもを育む上で有効となるのではないかと考える。また、この単元を行うことで必然的に教科関連、教科等横断が行われるようにする。

さらに、人とつながりたい、認められたいという欲求を大切にしながら、単元を構想していくことで、個が高まり、やがて、集団の高まりも見えるのではないかと考える。

子どもたちは、これまでの学年でそれぞれの学級の文化を形成してきている。そこで、進級当初に、子どもたちが今まで経験し、培ってきたことを出し合い、学級としての基盤となる事象を話し合いによって考えていく。新しい集団の中で、自分が培ってきた学級の様子を紹介し、よりよいものになるよう、折り合いをつけながら決定していくことを通して、子どもたちは、自分らしさを発揮しながら、自分たちの学級をつくり上げていく。その中で、自分や集団の成長を意識せず、決まったことや言われたことをただ行っていた子どももいることが考えられる。それは、他者認識の捉えのずれや、自己評価の低さが要因の一つである。そのため、自己の思いを全体の場で伝えることができにくいのではないかと考えられる。そこで、本単元を通して、「友達の役に立った。」「友達が喜んでくれた。」という経験が増えることで、主体的に学級に参

画しようとする子どもの育成につながるのではないかと考える。

学級という空間で活動を行う中で、子どもたちは問題にぶつかるたびに話し合いを行い、改善をしながらだんだんと学級を作っていく。特に、係活動では、メンバー募集や活動内容を子どもたち自身の力で行い運営することができるため、能動的な活動になりやすい。また、その内容も進化させながら、他者を意識した活動になることが期待できる。

本単元は、個を生かしながら学級づくりを行う単元である。年間を通して行うことで、子どもたちが目指す集団の完成を目的としている。日々の実践（朝の会、終わりの会や休み時間での活動）や、学校行事（運動会、校内キャンプ、わくわくコンサート）などを通して経験し、得てきたことがそのまま個や学級の成長につながることを意識して行う。また、学級がうまく機能するためには、いろいろな約束事や目的が必要である。それを子どもたちの話し合いにより作成させることで、子どもたちはより「自分事」として意識し、活動ができるのではないかと考える。また、時期ごとに振り替える時間を持たせることで、時間軸を通して自己を客観視する力も育ってくると考える。その積み重ねが学級の文化を創造することにつながっているということを子どもたちが認知し、より、客観視することで、自分や自分たちの未来を考える力も育ってくるのではないかと考える。

学級という集団を創造することは、子どもたちの学校生活の中心であり、基盤であるため、すべての教科学習が必然的にかかわっている。そこで、それぞれの教科との関連と、常時活動（朝の会、終わりの会、係、当番活動等）、特設活動（行事や児童会活動、いわゆるプロジェクト型学習）との関連を意識して学習を行っていく。

【単元の実際】（時系列）（○常時活動 ◎くすのき学習）

○ 学級開き（6月）

子どもの課題意識と主な学習活動	指導上の留意点（○）と評価（●）
<p data-bbox="213 1158 572 1189">よりよいクラスにしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれが自分の思いを出し合い、話し合う中で集団の現状を把握し、どのようなクラスにしたいか決める。 ・ 学級にとって必要な当番活動や自分たちの創意を生かした係活動について、話し合い、当番活動の詳細と係のグループ決めをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新しい学級の中で、これまでの経験を尊重させるような話し合い活動をする。 ● 所属感や有用感を感じることができたか。 ○ 話し合いの場とタイミングを吟味し、より能動的な話し合いとなるよう工夫する。 ● 自他の思いや願いを尊重しながら話し合い、活動意欲が高まったか。

これまでの学級で集団を創造し、学んできた子どもたちにとって新しい学級には、どのような学級になるのか、学級に溶け込むことができるのかなどといった、期待と不安が常に交差している状態である。子どもたちが主体性を発揮し、今まで培ってきたそれぞれの学級を生かすことができるよう、まず、子どもたちが3年生の時に経験してきた係や当番の方法、工夫された活動などを自由に発言させた。そのよさを互いに言い合ったり、質問に答えたりする中で、子どもたちは互いに交流し、学級としての初めての話し合い活動を行った。

結果、以下の三点が決定した。

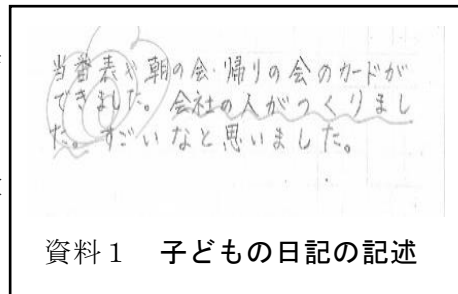
<ol style="list-style-type: none"> 1 日直は二人体制。朝の会の内容はスピーチ、質問、連絡 2 係活動については未定。方法として①係の内容を先に決めておく。②希望制。会社制。 3 学級の約束 明るくクラス、元気なクラス

○ 給食当番（6月）

給食当番を決めずにいると、それに気付いた子どもが、給食の時間の前に担任に訴えてきた。

- C 「給食当番が決まっています。どうしますか。」
 T 「どうしようか？」
 C 「給食当番がないと、給食が食べられない。みんなで決めないといけないと思う。」
 T 「それなら、みんなで相談しないといけないね。」
 みんなで相談し、給食当番を決める。
 T 「すごいね。自分たちで給食当番が決められましたね。」
 「他にも必要な当番も自分たちで考えてもらおうかな。」
 C 「やってみます。」

この後、子どもたちは、昼休みなどを利用して、当番表と当番の約束事を、合意のもと作成した。自分たちの経験を使って作成した約束事は、みんなで注意し合って守ろうと努力している。経験が力として表れ、この経験が、他の活動にも生かされていった（資料1）。

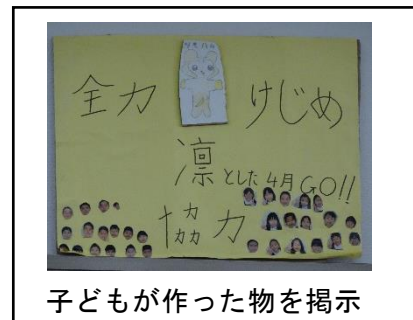


資料1 子どもの日記の記述

○ 学級の合言葉の設定（6月）

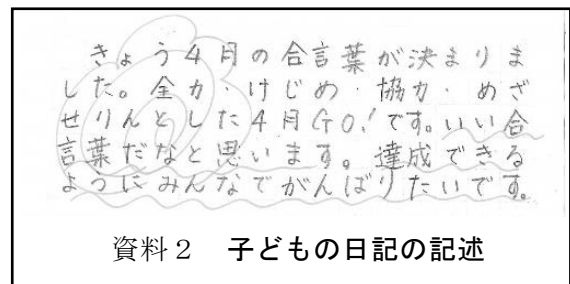
子どもたちから、学級全体の目標があればいいのではないかと、「学級の合言葉」に関する提案があった。そこで、学級の合言葉について話し合いの場を持つことになった。

- C 「4年月組の学級の合言葉があれば、もっと仲のよいクラスになれると思います。」
 C 「意見はありませんか。」
 C 「笑顔が大切だ」「思いやりのあるクラスにしたい」
 C 「先生はどのような学級にしたいと思っていますか。」
 T 「何でも本気でがんばるクラスになってほしい」
 ～
 C 「では、全力 けじめ 協力 目指せ 凜とした4月」
 が合言葉でいいですか。
 C 「はい」



子どもが作った物を掲示

学級の合言葉に対して、子どもたちの思いは様々であることが分かったが、何か共通の目標があった方がよいという思いは一緒であることが分かった。子どもたちの思いと教師の思いを織り混ぜ、合意形成を図りながら、決定していった。子どもたちの日記からも自分たちでつくった目標に向かってよりよいクラスをつくっていきたいという思いを見取ることができる（資料2）。

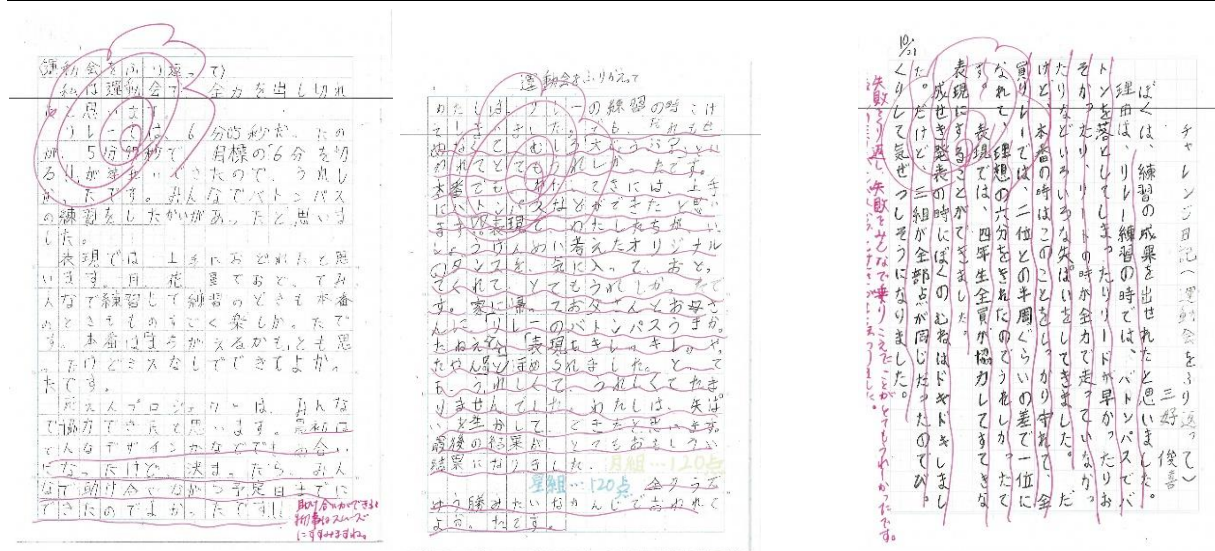


資料2 子どもの日記の記述

◎ 運動会を盛り上げよう（10月）

学級に参画しようとする子どもの育成に、学校行事はとても大きな役割を担っている。それをきちんと「プロジェクト型学習」として、計画・実践することが、有効な手段であると考えられる。

単元名 「運動会を盛り上げよう」		
子どもの課題意識と主な発言・行動	他教科との関連	分析と評価
<p>1 運動会に向けての「目当て」を設定しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 今までの運動会はどうだったかな。 ○ 心を一つにして優勝したい。 ○ 全力で取り組みたい。 <p>2 役割分担を決めよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ リレーの順番を決めたいな。 ○ 表現を考えたいな。 ○ 学級旗をつくりたいな。 <p>3 練習計画を立てたいな。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ カレンダーに書こう。 ○ リレーは昼休みを使って練習したいな。 <p>4 計画に沿って活動しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 計画通りにいかないな。 	<p>体育科</p> <p>図画工作科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デザイン ・使用する道具の選択 	<p>○ 「目当て」の設定には、今までの経験と、昔の映像などを見ることで、4年生なりの考えを持ち、話し合いをした。</p> <p>「リレーのバトンプスの成功」 「全部全力」「協力する」</p> <p>四月の合言葉を基に、この三点が目指す目当てとなった。</p> <p>○ 子どもたちは限りある時間を有効に使い、自分が「すべきこと」に全力で取り組んだ。目的がしっかりしているために、その話し合いはスムーズにできた。子どもたちの想いは「全員リレー」に向いていき、いつしか、時間があれば練習（昼休みも自主的に全員で練習）を行った。学級全員で心を一つにできるものとして、全員が取り組んでいった。</p>
運 動 会		
<p>5 運動会を振り返ろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 1位がとれて、うれしいな。 ○ 努力は人を裏切らない。 ○ 友達のいいところを発揮して頑張ったからうまくいったのだと思うよ。 	<p>道徳科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個性の伸長 	<p>○ 練習は失敗を繰り返し、悔しい思いをしながら、それでもあきらめず頑張ることができ、失敗をしても諦めず努力する力を見取ることができた。振り返りの話し合いで、子どもたちは、口々にお互いのよかったところを伝え始め、認め合った。</p>



資料3 運動会後の子どもの日記より

この活動を通して、子どもたちは仲間との活動に対してプラスのイメージを抱いていることが分かる（資料3）。また、自分の成長と仲間の成長をつなぎ、「クラスの成長」として認識している。自分を客観視する力と同時に、他者意識の広がりも感じ取ることができる。

◎ 四月成長式をしよう

「四月成長式」とは、自分たちの成長を実感し、喜び合ったり、今までお世話になった人たちに感謝の気持ちを伝えたりすることを目的として行う式である。

単元名 四月成長式をしよう		
子どもの課題意識と主な発言・行動	他教科との関連	分析と評価
<p>1 二分の一成人式で伝えたいことを考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 感謝の気持ちを伝えたい。 ○ 自分の成長を確かめたい。 ○ 自分の将来について考えたい。 <p>2 どのようなことをすると伝わるかな。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 四月で学んだことを発表したいな。 ○ 学級全体で演奏したいな。 ○ アルバムを作りたいな。 ○ 将来の夢のスピーチをすることいいな。 ○ すべきことがたくさんあるな。 <p>3 役割分担をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 前のことを生かしてカレンダー作ろう。 ○ アルバムづくりについて、いろいろ決めたいな。 <p>4 計画に沿って活動しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 責任持ってしないといけないな。 ○ すべきことがたくさんあるな。協力が必要だ。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">道徳科</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">音楽科 ・頭声発生</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">国語科 ・スピーチ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">図画工作科 ・デザイン ・想像力</div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 成人式について話をし、成人することはどういうことなのかを考え、自分たちは丁度その半分の節目の時期であることに気付いたことで、自分たちも何かしたいという思いを自然に持つことができた。そして、名前を「四月成長式」と決め、何のためにするのかを「自分の過去、現在、未来について考える」「感謝の気持ちを伝える」という大きくまとめて二点に絞った。 ○ 何のためにするのかという目的をしっかり持っていたので、どのようなことをするかということもスムーズに決めることができた。 ○ 子どもたちは限りある時間を有効に使い、自分が「すべきこと」に全力で取り組んでいた。 ○ 自分の役割を果たし、「四月成長式」を共に創り上げることを通して、仲間と活動することの楽しさや喜びを味わい、仲間と協力することの大切さを実感したり、集団での達成感を感じたりしていた。
四 月 成 長 式		
<p>5 活動を振り返ろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ お家の人に喜んでもらえてよかった。 ○ 緊張したけど、うまくいったよかったです。 		<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動を通して、たくさんの人とのかわりの中で育ち支えられていることに気づき、感謝する気持ちを持つとともに、かけがえのない自分の存在を実感することができた。

私は、昨日の4月成長式をしてよかったです。理由の一つは、みんなと協力できたことです。それに、私達のチームは、ワイズも出したから、新しい知識も増えたとし、相談などをしたりすること、友達とも、と仲をうかめることができました。理由の二つ目は、自分の知らない相手のいいところとか、たこと。私は、同会たんとうだっただけで、本番前の練習で、自分達をアドバイザーでうしたときに、「～さんを見てるから気をつけてね。」と立川さんがいてくれたとき、「立川さんってまじめがいがあるいな。」と初めて思いました。他にも「～な。」と思、た人はたくさんいます。私は、4月成長式をやったことで、少し大人に近づいている気がしました。

遠せい感がありまして、とくに未来スピーチでは一人での、たのではずかしかったです。そして、おわりのことばは、おすびでできていたけど、みんなもうして、よんでやっしてしまいました。社会では、う聞き聞しかとけなかつたのでどうかな？と思いました。みんなううこのたいっつたので、すこくれんしゅうしてよかった。おと思いうれしかった。今園の4月成長式でいろいろことがわかりました。

- ① れんしゅうをいっげりする。
- ② せんちゅうにまげない。
- ③ やりぬく力：全力でやれるがとって、大羽にまづきました。なぜか、1～3年までの、は、がうとちがう境がして、かんぼううと思えませんでした。このあかげで未来で本場の成人式のためにかんぼううと思えてよかったです。

私は、昨日の4月成長式をしてよかったです。理由の一つは、みんなと協力できたことです。それに、私達のチームは、ワイズも出したから、新しい知識も増えたとし、相談などをしたりすること、友達とも、と仲をうかめることができました。理由の二つ目は、自分の知らない相手のいいところとか、たこと。私は、同会たんとうだっただけで、本番前の練習で、自分達をアドバイザーでうしたときに、「～さんを見てるから気をつけてね。」と立川さんがいてくれたとき、「立川さんってまじめがいがあるいな。」と初めて思いました。他にも「～な。」と思、た人はたくさんいます。私は、4月成長式をやったことで、少し大人に近づいている気がしました。

資料4 四月成長式直後の子どもの日記より

友達に対する感謝の気持ち、お世話になった方々に対する感謝の気持ちが表れている。また、自分たちのことを誇りに感じていることが分かる。子どもたちは、他者の思いや成長、努力を通して、客観的に自分が所属する集団の成長に気付き、この集団の中で、何かしたいという思い、すなわち「参画したい」という思いが芽生えていたことが分かる（資料4）。

【単元の成果と課題及び次年度に向けて】

- 学級に参画しようと思う気持ちを持つためには、「出会い」の場面がとても重要である。今までの経験を生かしつつ、新しい環境に対応するためには、ある程度の自由が必要である。学級としての形だけに捉われるのではなく、進んで学級のことを考え、自分の思いと他者の思いをつなげつつ、よりよいものを目指すことができる環境づくりが大切であると考えられる。
- 「役に立てるかもしれない。」「できるかもしれない。」という欲求が高まってくることが、自分らしさを生かそうとすることにつながり、学級に参画しようとする子どもの育成につながった。そのためにも、自己理解を深めたり、他者に認められたりする経験を多くさせる必要性が考えられる。
- 子どもたちはたくさんの活動を通して、振り返りを行い、自己評価、他者評価、そして学級評価を繰り返してきた。その繰り返しによって他者意識の広がりが見え、よりよい学級にしよう、と、培ってきた力を使って、主体的に動く姿が見られた。
- 自分らしさを生かし、集団に参画しようとする、ぶつかることもある。また、活動に足りない部分や、誰もやりたくないと思うことも出てくる。そこで大切にしたいのは、思いやりであり他者への配慮である。それについては、まだまだ個人差があり、身に付いていない子どももいる。意図的に学級や個に応じた壁を乗り越える場を設定し、やり通したいという思いを持たせられるようにする必要がある。
- ☆ 自分らしさを発揮するためには、互いに補完し合う関係づくりが必要である。さらなる補完し合う関係性の構築と、その中で、子どもたちが大きく活動できるような場の設定を工夫していきたい。

(森田 宏美)